学園報　皇學館　第36号

発行・編集　学校法人皇學館　企画部
TEL0596-22-6496・8600

大　学
大学院・専攻科・文学部・教育学部・現代日本社会学部・社会福祉学部
〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町1704
TEL0596-22-0201㈹　FAX0596-27-1704

高等学校・中学校　三重県伊勢市楠部町138
【高校】〒516-8577　TEL0596-22-0205㈹
【中学】〒516-8588　TEL0596-23-1398㈹

●今号の注目記事

1面
平成24年　年頭講話
2面
「元服式」で晴れの門出
留学生日本語弁論大会
王娜娜さんが最優秀賞
3面
伝統の心と技Ⅲ
4・5・6面　高校・中学
卒業生の声　など
7面
現代日本塾&経営セミナーを開催
8面
学生が岩手で震災ボランティア
●連載
2面
皇學館人物列伝⑯　清水孝之
4面
学び舎探訪　NEW!
高校教員室
7面
先輩、お元気ですか
山本啓介氏
（国文学科第34期・平成11年卒）

日本人としての自覚を持った人間に

平成二十四年　年頭講話

一月十二日、本学において学長年頭講話および学内成人式が執り行われた。記念講堂での年頭講話にはおよそ二百名が出席。学生は引き締まった表情で、清水潔学長の話にしっかりと耳を傾けていた。

講話の中で清水潔学長は昨年起こった東日本大震災について触れ、大学としてできることは被災地の再生復興のためにそれを担いうる人材を育成すること、と強く語った。その上で、めざす人材像に絡みブータン国王夫妻が来日した際の国会演説を紹介。〈――日本国民の皆様は最悪の状況下でさえ、静かな尊厳、自信、規律、心の強さをもって対処されるという日本人特有の特性、卓越した資質を示されました――〉との言葉に、「日本を正しく評価し、そして、日本人の信念、国民性を直視し、素直に表現し賞賛してくださった素晴らしい演説」と心打たれた旨を述べた。

また、吉田松陰が従兄弟の元服式に与えたとされる「士規七則」を引用。「凡そ生まれて人と為る、宜しく人の禽獣と異なる所以を知るべし。蓋し人に五倫あり……」と一節を解説しながら「動物は本能によって、人は道徳によって立つ。人であればどれほど貧乏でも他人のものを盗ろうとしない。信義を守り、理想をもって公に献身する。その根本を知らねばなりません」と話した。そして、「昔の元服は十五歳。この年齢を迎えると、自らの一言一行に対して全責任を負うことが求められた」と学生に大人としての心得を説いた。

大人として、また、日本人としての自覚と尊厳をもった人間に成長してほしいと熱く語る清水学長

コミュニケーション学科二年の森下菜々美さんは「震災復興などで役に立つことのできる人材にとの言葉が印象に残った」と話し、「そういう人間になれるよう頑張ります」と今年の抱負を語った。教育学科三年の上野正貴君はゼミで松下村塾跡を訪ねる予定になっており、「今日の講話で吉田松陰先生が伝えようとしたことをもっと知りたいと思った」と話していた。

二十歳の決意を胸に

年頭講話の後、倉陵会館の二階において学内成人式が行われた。新成人を代表して挨拶に立った神道学科二年の東省利君は「今日から成人として選挙権をはじめ社会的な権利を得るとともに、年金の支払いなど義務も負うことになる。一社会人として自立し、日本のため、世界のために貢献できる大人になりたい」と決意を語った。

その後、式は立食パーティーの時間に。写真を撮り合ったり若者らしく料理を口いっぱいに頬張る姿が見られ、賑やかな雰囲気に満ちていた。

教職員の方々や父母への感謝の気持ちを述べる東君

賑やかな雰囲気に包まれた会場

失われた〝端正〟さ

――平成二十四年 新春・心象風景

皇學館高校・中学 学校長　中村貴史

元旦や一系の天子富士の山
内藤鳴雪のすらりとした、形のいい名句だが、そう思えるようになったのは、最近である。若い生意気盛りの頃では、良い物の価値がわからないことが多い、そうした例のひとつである。虚子の「去年今年貫く棒の如きもの」という精神性豊かな句も正月に、また、ふさわしい。

ところで、今年の正月は、こうした清新さを特に欠いている。どうしたことだろうか、と思う。リビングのTVからは、楽屋落ちに満ちた場しのぎの笑いが流れている。ふと、寄席に通じた知人が実際に見た、八代目桂文楽の最後の高座のエピソードを思い出す――。

かなり有名なエピソードだが、この知人は、TBS落語研究会の、その夜の席に居合わせた。文楽の当日の出し物は「大仏餅」だったが、神谷幸右衛門の名が出なくて絶句した。繰り返したが、出ない。やがて、八十の老噺家は、「申し訳ありません…もう一度、勉強し直してまいります」と深々と頭を下げ高座を降りた。「〝寂として〟という言葉があるが、本当だね。何ともいえない沈黙があったよ」と彼は語っていた。僕が熱心に聞いた頃は、六代目圓生、八代目林家正蔵、五代目小さん、金原亭馬生が健在で、黄金期といっていいのだが、文楽は、すでにいなかった。したがって、残された映像と音源からしか彼を知らないが、いつも紋付袴の形のいい高座姿―八代目正蔵にもそれがあった―は、印象から消えない。

そうか、現代の社会から、払底したのは、〝端正さ〟というものだ、と、納得した。この日本の社会全般から影が薄くなっているのは、高潔で律儀な端正さ、といった性格のものである。

「この国、どうなっていくのかな」と、思わない日はなく、荒廃の様は、渡辺京二の「資本主義文明がつくり出した自由な商品流通空間」のせいだという言説に妙に納得するこの頃なのだが、ネジを巻き直して、生徒たちに端正な高潔さの必要をどう伝達していくか――そのことを考えてみたいと思っている。

皇學館サービス株式会社を設立

平成二十四年二月一日、学校法人皇學館では本法人が百パーセント出資する事業会社「皇學館サービス株式会社」を設立した。これは、従来学園内で個々に行われていた物品購入や契約委託業務等を同社が代行することで、業務の効率化・合理化を図ろうというもの。集約することによって支出の削減を実現でき、教育・研究環境の充実、学生サービスの向上をめざす。

皇學館サービス株式会社

会社概要

設　立	平成24年２月１日
所在地	伊勢市神田久志本町1704番地
資本金	900万円
役員構成	取締役　９名
	監査役　２名
	実務担当者　２名

サービス内容（当面）
- 施設総合管理
- 自動販売機管理
- 保険代理業（損保・生保）
- 物品調達　など

※準備を整え次第、サービスを拡大予定

倉田山春秋

先日、伝統の歌会始の儀が皇居で行われた。今年のお題は「岸」であった。うち皇族方お二人の御歌を紹介させていただく▼「帰り来るを立ちて待てるに季のなく岸とふ文字を歳時記に見ず」。皇后陛下の御歌である。季節を問わず、誰かの帰りを待ち岸辺に佇む人の姿に思いを馳せて詠まれたもの。待つ人の心に寄り添われた御歌である▼眞子内親王殿下のお歌、「人々の想ひ託されし遷宮の大木岸にたどり着きけり」。平成十八年に御木曳（川曳）をご覧になった時のことを詠まれたもの。昨年ご成年を迎えられた殿下は十一月に神宮へご参拝になった。平成二十五年に遷宮を控えた我々に力を与えてくれるお歌である▼来年の歌会始のお題は「立」。様々な「立」の場面があるだろう。まもなく神宮では御正殿の建築の初めに際し、御柱を立て奉る「立柱祭」。学園では卒業式、学生達が志を立て巣立っていく。それぞれの立場で、国家有用の人材として活躍していただきたい▼今年本学は創立百三十周年、再興五十周年の節目の年を迎えた。創立時に思いを馳せ、新たな歴史を刻んでいきたい。

「元服式」で晴れの門出

男子が初めて頭に冠を戴き、成人したことを祝う元服式。現在の成人式よりも厳粛に、そして心を込めて行われていた伝統ある儀式が、現代日本社会学部の文化継承実習「礼法」の授業において執り行われた。

厳かな雰囲気の中、因の親より冠が被せられる。「元」は頭首を、「服」は冠を指す。

十一月二十二日に催された元服式には本学の特別招聘教授、弓馬術礼法小笠原流宗家三十一世である小笠原清忠先生に指導を受けている現代日本社会学科二年の学生十五名（男子十四名、女子一名）が臨んだ。

当日、学生たちは、男子は直垂（ひたたれ）、女子は水干（すいかん）という武家の華やかな正装に身を包み、厳かに祭式教室に入場。その後、冠を授ける因（ちなみ）の親役代理として同学科主任の新田均教授が入場し、式が始まった。学生たちは授業で稽古をしてきた、つま先やかかとを付けたままのすり足で歩行。これは身体の重心を移動せず、体のバランスを整え足腰を鍛えるとされる武士の歩き方である。座り方や立ち方なども優雅な型に則っており、凛とした雰囲気の中、一人ひとりが新田教授から冠を授かった。その後、皆で一膳の食事と酒（未成年者に対しては酒でない飲み物）をたしなみ、記念品と祝いの言葉が贈られて式は終了した。

初めての経験に緊張しながらも、式後、学生たちは一様に晴れやかな表情に。「大人の仲間入りをしたんだな、と実感しました」「二十歳になったことをきちんとした形で祝っていただけてすごくうれしかったです」などと元服式の思い出を胸に刻んでいた。

一膳が因の親および少人に対して進められる

第十回 留学生日本語弁論大会

王娜（おうな）さんが最優秀賞！

昨年十一月十三日に津市で開催された第十回留学生日本語弁論大会三重県大会において、本学の中国人留学生、王娜娜さんが最優秀賞に輝いた。

王さんが選んだテーマは「私の日本留学生活」。内容は、三人の日本人との出会いを通して学んだことや感じたことをつづった体験記だ。その一人、バイト先の店長について王さんは語る。「店長はわたしを姪のようにかわいがってくれ、ほかの人と分け隔てなく接してくれるのでいつのまにか自分が外国にいるということを忘れてしまう。来日する前は〝日本人ってどんな人たちなんだろう〟と国籍の違いを意識していましたが、普通に接してもらったことで〈みんな同じ人間なんだ〉とあらためて思いました」。

表彰され嬉しそうな表情を浮かべる王さん

時には、「中国人は毎日烏龍茶を飲むんでしょ」とか「虫を食べるの？」といった日本人のステレオタイプな問いに苦笑することもあるという王さん。「でも、そんな質問をするのは互いの国や人のことをよく知らないから。仲良くなれば自然と偏見や誤解をなくすことができるはずです」。

受賞の知らせを聞いて、河南省で暮らす母親は「うちの娘はたいしたもんだ」と喜んでくれたとか。「思いがけず、いい親孝行ができました」と語る王さんが大切にしている言葉は〈袖振り合うも多生の縁〉。将来は通訳として両国の懸け橋となれるようがんばりたい、と顔をほころばせた。

皇學館人物列伝 16

清水孝之（しみず たかゆき）

蕪村研究の一頂点を確立

しみず たかゆき◆東京帝国大学文学部国文学科卒業。広島女子短期大学助教授、高知女子大学教授、愛知県立芸術大学音楽学部教授を経て、昭和五十九年皇學館大学文学部教授着任。著書に『新潮日本古典集成 與謝蕪村集』『追跡・三浦樗良』など。大正七年（一九一八）～平成六年（一九九四）。

痩身のひょう然とした風貌はいかにも文学者的である。江戸時代の与謝蕪村を中心に俳諧史研究者として活躍した清水孝之は大正七年愛知県岡崎市伊賀町の通称月僊寺（昌光律寺）の門前で生まれた。そこで、月僊の廬山の襖絵、龍図、涅槃像などの大作を見ながら幼いうちから審美眼を養い、美術青年として育った。

清水の蕪村研究は美術に対する関心から蕪村自身が俳諧と画業のいずれに重心をおいていたかを探求するもので、その内面的関連を考察し、画業に重きを置いていたと結論付ける。大阪大学に提出された文学博士の学位論文も「蕪村は画家か俳人か――その俳諧史的研究」というテーマであった。たとえば、明和年間に讃岐で三年間を過ごす中で丸亀妙法寺にある蘇鉄図や竹石図などから画業のうえで清新な作風を獲得したことが句の作風にも反映されていく過程を明らかにしている。

清水は絵にせよ文学にせよ多くの佳作を見、さらに自らが実作しなければ作品の評論・鑑賞の域にまでは到達できないという研究態度を特徴とした。愛知県の知立市立知立南中学校に清水の作詞した校歌が残されているが、東西南北の風によって季節を表現し、さらに「かきつばたきりりとさけばつれだちて／はるかな旅をたしかにあゆめ」の序歌が付されているという趣向を凝らしたものになっている。

少年期の肺炎で聞こえにやや難があったが、本学での逸事として、延長して授業を続ける清水にある学生が「先生、チャイムが鳴りましたが」と声をかけたのに応じず、別の学生が授業内容について質問したところすんなり答えたということがあり、学生たちの間では聞こえないふりをされているだけではないかという噂がささやかれた。本学在任はわずか三年であるが、学生たちに大きな印象を与えた。

晩年は、蕪村が句を激賞した三浦樗良の研究を進め、本学出版部から刊行した『追跡・三浦樗良』は平成四年に文部大臣賞を受賞している。

国文学科准教授　齋藤　平

日独学術交流

ドイツ人研究員７名が来勢

十二月十五日、ドイツ日本研究所（千代田区、代表 フロリアン・クルマス）の研究員七名が神宮参拝と神道研究の旅の中で本学を訪問。本学教員との懇談や茶道体験、祭式授業見学、神道博物館見学を通じて、日本の神道文化への理解を深めた。

前日、一行は神社本庁国際交流課の案内により二見興玉神社と外宮を参拝し、神宮徴古館と神宮美術館を見学。当日は早朝に内宮を参拝、御神楽を奉納された後に、十一時ごろ本学記念館に到着された。

記念館前にて撮影。両国の文化・学術交流を深める機会となった。

本学側は清水潔学長をはじめ、半田美永文学部長、櫻井治男社会福祉学部長、深草正博教育学部長、宮川泰夫現代日本社会学部長のほか、計十三名の教員でお出迎え。両代表の挨拶の後、本澤雅史教授より「神道の自然観と神観念 ～伊勢の神宮を中心に～」と題する基調講話が行われた。その後、一同相互に自己紹介と質疑応答をいたし、昼食を交えて日本における神道の意味などについてさらに懇談した。

食後は、茶室で淺沼博特別招聘教授（裏千家正教授）の指導と茶道部学生たちの点前により薄茶をお召し上がりいただき、茶の湯を通じて日本文化に親しんでいただいた。また、祭式教室において三木通嗣先生の指導による祭式授業を見学。神道博物館では岡田芳幸教授からの解説により神道祭祀の姿や心について理解を深めていただき、十五時過ぎに帰路につかれた。

神道博物館にて解説を受けながら展示品に見入る一行

シリーズ 学びの現場から Ⅲ

伝統の心と技

本学では平成二十年度より演習科目「伝統の心と技」をカリキュラムに取り入れている。目的は日本の伝統文化に触れ、そこに込められた「心と技」の真意を学ぶこと。実際にどのような授業が行われているのか、シリーズで紹介する。

姿勢正しい構えやすり足、扇の所作を習う学生たち。〝基本に忠実〟が鉄則だ。

【能楽】

講師●観世喜正先生

動きに意味を込めて

ユネスコの世界無形遺産にも登録された日本を代表する伝統芸能「能楽」。授業では能の基本要素である謡いと舞い、それに伴う作法を身につけることが目的だ。講師を務める観世喜正先生は「鑑賞することはあっても、演じる側になるのはめったにない貴重な経験。能ならではの発声や動きを習うことで学生に得るものがあれば」と語る。この日練習した演目は「鶴亀」。舞いの時間ではすり足や扇を用いた所作の指導が行われ、先生は腕の一振りにどれだけの意味を持たせられるか、表現力を養うことが大切と説いた。

能独特の謡いの発声や節の読み方を学ぶ

「お琴を習っていて日本の歌や踊りに興味があった」と受講の動機を語ってくれた国文学科一年の渡邉真衣さんは、「謡いではお腹から声を出すので腹筋をよく使います。おかげで姿勢がよくなり、普段の声も大きくなりました」と笑顔で話す。国史学科一年の赤井駿平君は「足の運び方や声の出し方など知らないことを学べるので新鮮」と言い、「居合いをやっているのでとても勉強になります」と語っていた。

勉強になると話す渡邉さん(上)と赤井君

【江戸の芸能史】

講師●三遊亭栄楽先生

江戸の〝おかしみ〟を学ぶ

落語を中心に、江戸時代に生まれたさまざまな芸能を学ぶこの授業。教壇に立つのは本学の卒業生で非常勤講師を務める三遊亭栄楽先生だ。

今回の授業で主に取り上げられたのは「川柳」と「浮世絵」。川柳では「役人の骨っぽいのは猪牙に乗せ」「今食えばよしと魚屋置いていき」「恥ずかしさ医者へ魚の値が知れる」など大衆の共感を誘った川柳を読み上げながら、当時の世情や江戸っ子気質について解説した。浮世絵では喜多川歌麿作「難波屋おきた」を例にとり、名前を出すことを禁じた幕府への対抗策として生まれた謎解き絵「判じ絵」について説明した。

国文学科一年の北浦佑真君は「おせち料理の意味を授業で初めて知った。日本の文化に少しずつ詳しくなっていくことができて嬉しい」と語る。同東原沙央理さんは「プロの方から学べる貴重な機会なので毎回楽しみです」と話していた。

上／江戸の芸を熱く語る三遊亭栄楽先生

下／「難波屋おきた」の浮世絵は、左上の方形の中が「判じ絵」となっている。「菜(な)二把(にわ)」「矢(や)」「沖(おき)」「田(た)」。

見聞が広がると話す北浦君(上)と東原さん

お仕事拝見

本学と連携協定を結んでいる伊勢市。このコーナーでは〝地元愛〟を町づくりに活かすスペシャリストである伊勢市役所の方々にこれまでの取組みや伊勢の魅力について語っていただきます。

伊勢の魅力を情報発信してほしい

現在伊勢市では、平成二十五年に執り行われる第六十二回神宮式年遷宮に向け、その情報発信と市内の観光振興、観光客の皆さんのおもてなしを中心に、観光客数一千万人を目標として観光政策に取り組んでいます。

具体的には、内宮周辺に観光客が集客していることから、伊勢商工会議所や伊勢市観光協会と連携し、お伊勢参りの慣わしである「お伊勢参りは外宮から内宮へ」を情報発信しています。また、外宮への集客事業や遠方地からの誘客事業を実施するとともに、伊勢志摩地域で協力しながら外国人誘客事業などを展開しています。

伊勢市観光企画課　北村勇二 課長

また、伊勢市のリーディング産業である観光産業は、関連産業の裾野が広いことから、国内外から多くの観光客が伊勢を訪れていただくことにより、雇用創出効果を生み、地域経済の活性化が期待されると考えられます。

皇學館大学の学生の皆さんは卒業後に、神宮との関わりを持たれる方も多くみえると聞いています。やはり、伊勢の観光を語るには、神宮はなくてはならない存在であります。神宮にお参りに来ていただいた参拝者の方が市内の河崎や二見地区などの観光地を訪れ、市内に長く滞在してもらえるよう、また心の奥深くに素晴らしい思い出を残していただき、もう一度伊勢を訪れたいという方が増えるよう取り組んで参りますので、皆様にも、伊勢の素晴らしさを情報発信していただければ幸いです。

リレーエッセイ　私の学生時代

紆余曲折の人生も面白い

教育学部助教　中條敦仁
皇學館大学大学院卒業

目標もなく過ごしていた高校三年の夏。テレビに関心のなかった私が、珍しくある番組に見入っていた。そこには、白衣を着て院内を歩く人の姿が。当然、医者だと思ったその人は、病院内で働く「心理カウンセラー」だった。なぜか、白衣を着て病院内を颯爽と歩く自身の姿を想像し、突如カウンセラーを目指す決意をしたのである。

当時、カウンセラーになるには、文学部心理学科で学ぶことが主流であった。理系で国語・社会が苦手であった私は、一念発起し文系学科の心理学科を受けることに。能力のない私に文系大学の合格通知が届くわけもなく…。気が付けば、心理学科ではなく国文学科に入学していた。

以後、国語の苦手な私にとっていばらの道が続くと思われたのだが、国文学は高校までの国語とは違っていた。特に『平家物語』の伝本の比較研究が面白かった。一文字一文字比較し、伝本の関係性や、なぜ本文が違うのかを考える。その作業は統計的・論理的で、高校生まで得意としていた理系の血が騒いだのである。

同朋大学→佛教大学大学院→皇學館大学大学院と大学を転々、流浪の民となり、研究対象も勅撰和歌集へとシフトした。

このまま国文学研究者として落ち着くのかと思った矢先、中学・高校の教員として働くこととなり、いつしか国語教育研究へと再びシフトしていく自分がいた。その結果、現在に至るのである。

高校から現在まで。なんとも落ち着きのない人生である。何よりも高校まで国語嫌いの私が、現在国語教員であることに驚く。世の中何が起こるかわからない。物事を深く追究することは大切であるが、一方で「とにかくやってみよう」と様々なことにチャレンジする精神も大切なのではないかと、自分の紆余曲折の生き方を振り返るとき思うのである。

お伊勢参り落語会を開催

三遊亭栄楽氏が十一月二十三日に落語会を開催した。これは、白装束にわらじという江戸時代の旅姿で東海道を踏破する「お伊勢参り」の一環で、東海道沿線の神社など十六カ所を会場に勧進落語会を開催したものだ。第三回となる今年は十月十六日に東京日本橋を出発。最終目的地の神宮まで全四六四キロメートルの行程を歩き抜き、最終日となるこの日を本学で迎えることとなった。

会場には祝日ということもあって老若男女約百名が集い、栄楽氏の巧みな話芸に聞き入っていた。なお、入場料等はお伊勢さんへの奉納金にする予定だったが、この度の東日本大震災で多くの神社仏閣が被害を受けたため、その義捐金にあてられた。

皇高NEWS

視野を広げ、学び深める

独自の校外活動を実施

皇學館高校では生徒に幅広い知識と視野を養ってほしいとの思いから、修学旅行をはじめ独自の校外学習プログラムを実施している。日本固有の伝統芸能や風土に触れることで、生徒にとっては見聞の広がる真の学びの場となっているようだ。今回は生徒たちが経験を通して得た発見や気づきを紹介する。

北海道・修学旅行　二年

北方領土で感じた島民の方々の人生

二年八組　長岡由莉

北方領土と伊勢市の交流が未だ続いていると元島民の方から聞き驚きました。ほかにも、北方領土について詳しく教えていただきました。戦後はソ連軍が占領していて、島民の方たちは想像以上に過酷な生活を送っていたそうです。夜中の突然の発砲、不条理な理由での銃殺、シベリアへの強制連行など……。人間として扱われなかった事に占領の恐ろしさを感じました。島民の方の高齢化が進む中、私達が知り伝えることが重要だと思いました。

国後島を見ながら、元島民の河田さんに当時の話を伺う

熊が出没

二年九組　橋爪笙子

修学旅行三日目は小樽市内自由散策があり、盛りだくさんな一日でした。異国情緒漂う建造物、静かに流れる美しい運河の水。その独特の雰囲気を感じながらの買い物は、とても充実したものになりました。夕食にはジンギスカンをお腹いっぱい食べて夜景スポットへ向かいましたが、熊が出没した為に夜景を見ることができませんでした。このことだけが心残りで残念に思いましたが、朝から夜まで楽しい時間を過ごすことができました。

修学旅行３日目は生徒たちが楽しみにしていた小樽自主活動の日。昼からは雨も上がり、買い物などを満喫したようだ。

湖の個性を楽しむ

二年六組　山下琴己

北海道の代表的な湖である知床五湖、摩周湖、屈斜路湖に行きました。最も綺麗に感じた湖は摩周湖。〝摩周湖ブルー〟と言われるだけあって透き通っていました。世界でも認められた透明度だそうです。静かで気持ちが穏やかになったのは知床五湖。屈斜路湖は辺りのほとんどすべてが湖で囲まれており、頂上まで行くと一望できました。

雄大な景色を堪能

平城宮跡フィールドワーク　一年

知的好奇心を刺激

一年七組　皿屋真里

今回のフィールドワークで一番関心を持ったのは大極殿です。そこで行われていた「朝賀の儀」とは一体どんなものか、知りたいと思いました。建物の朱色や左右対称になっている部分も好きだし、どうしてここにこのような建物があり、このように造られたのかなど、興味は尽きません。瓦ひとつとっても現代の物とは形や重ね方、質感が違います。また、当時の人々は何を見て、感じ、どんな都、国にしていきたかったのか。それを知ることはなかなか容易なことではないとは思うけど、少しでも知ることができれば楽しいし、想像するだけでワクワクしてきます。あまり時間がなくゆっくりはできなかったけれど、平城京に少しでも触れることができ、充実した体験ができたと思いました。

右は全長30mにわたる遣唐使船の復元展示
平城宮跡からは鬼瓦をはじめ多数の瓦が出土している

雅楽鑑賞会　一年

不思議なリズムに惹き込まれ

一年九組　山﨑あかね

神社でこのような音楽を聞いたことがあったけれど、生で聞くのは初めてでした。ペースがとてもゆっくりしていて、優雅で、眠りに誘われるような感じでした。一定のリズムではない感じが不思議でひきこまれました。そして、音楽だけでなく舞の動きも静かで凛としていて、新鮮な気持ちで見ることができました。普段聴かないだけに、こうした音楽も刺激になっていいなあと思いました。今日は昔から変わらない〈日本の音楽〉を聞くことができ、良い体験になりました。

幻想的な調べに聴き入る

日本の力はすごい！

一年二組　右京駿一

雅楽を初めて鑑賞して、こんな曲が奈良時代からあることにまず驚きました。そして、楽器一つ一つに役割があるなど昔の人たちが本当によく考えていたこと、何より伝統芸能として今なお雅楽を守り伝えている日本人にすごさを感じました。この経験を通して得た自分の考えを、もっと将来のことにいかしていきたいと思います。

学び舎探訪 1　和気藹々の雰囲気漂う……高校教員室

高校には、教員室が二つあります。一つは多田教頭、平賀教頭を頭に、西井部長率いる戸上、堅田集団の総務部、奥山部長率いる左右田、河俣、熊崎、竹内、花井集団の教務部とALTのトムがいます。また、ここには、１の１の担任で学年主任でもある吉川率いる馬場、川西、日々野、川合、井田、小塚、林、角屋、笠井の各先生で構成される明るく賑やかな一年学年団が陣取り、色んな中学出身の生徒を指導しています。

さらに、２の９の担任でもある村崎主任率いる、高倉、石本、出口、相原、丹羽、中西、野間、中川の各先生で構成される二年学年団も同居しています。

この教員室の他、３の１の担任でもある尾上主任率いる三年学年団の教員室では、福西、田中、中林、柴原、松本、伊藤、上野、久保、黒田の正担任の他、中島、竹川の副担任の先生方が指導にあたっています。今は推薦入試の段階ですが、筑波大、信州大、三重大、京都教育大、三重県立看護大、福岡県立大といった国公立大のほか、慶応義塾大、皇學館大をはじめ中央大、中京大、名城大、京都産業大、近畿大といった私立大学にも合格しています。今も他の難関大学をめざして努力を続けている生徒が沢山いて、各担任はエールを送っているところです。

どちらの教員室も賑やかで和気藹々とした雰囲気が漂っており、訪れる生徒はリラックスした表情で用件を済ませると「失礼しました!」と元気な声を残して帰っていきます。

また、教員室横の長机では毎夕遅くまで質問のある生徒が残り、担当の先生に喰らいついて勉強する姿が下校時間まで絶えません。

休み時間は生徒の質問＆相談タイム

皇中NEWS

「命の大切さ」を学ぶ

十二月十三日に助産院エンジェルスマイルモモの院長宮木孝子先生から、「命の大切さ」について講演して頂いた。赤ちゃんがどのようにしてお母さんのお腹の中で成長し産まれてくるのか、赤ちゃんを想う両親の気持ち、身体の仕組みなど様々な観点から命について学ぶことができた。実際に妊婦さんや生後数カ月の赤ちゃんを連れたお母さん方にもお越し頂き、胎児の心音や妊娠から出産までの体験談を直接聞くことができた。実際の出産シーンでの母親の大変さや出産後の両親の幸せ溢れる笑顔の写真は生徒たち一人ひとりも大切に思われて生まれてきたのだと実感できるものであった。次に生徒の感想を掲げる。

お母さんの胎内で赤ちゃんがどのような成長過程をたどるのか、人形を用いて体験

◆スライドショーでの出産直後のお母さん、お父さんはとても嬉しそうで命が新たに産まれるってなんて温かいものなのだろうと感じました。私も結婚して幸せな家庭を築けたらと思います。

◆宮木先生の「赤ちゃんはお母さんを選んで雲の隙間から降り注ぐ光に乗ってお腹にやってくる」という言葉が印象に残りました。私もお母さんを選んで産まれてきたのだからお母さんと離れることが無いようにしたいです。

◆今まで出産は鼻にスイカを入れるくらい痛いし、育てるのは大変だし、仕事もできなくなると否定的な考えを持っていました。実際に妊婦さんからお話を頂き、出産の写真を見て素敵だなと感じました。将来、望まれた幸せな出産をしてみたいと思いました。

◆自分が生まれるには何億人もの人が繋がっていると知って、そのうち一人でもいなかったら自分が存在しなかったのだと知りました。命をもらい今まで生きてこられたことに感謝したいです。

◆今までなんとなく生きてきたという気持ちが胸の中にありました。でも出産の大変さ、お母さんやお父さんたちの思いを知り、きちんと目標を立てて生きることを楽しみながらその意味を探さなければいけないと思いました。

年々レベルが向上

百人一首大会

一月十八日、五・六限目にセミナーホールで百人一首大会が実施された。冬休みから校友会役員を中心に準備されてきた恒例の新年行事。クラス対抗で六歌仙にちなんだ六チームに分かれ対戦し、二十五首から十五首を競った。各組の総合枚数により優勝クラスを決した。

競技が開始されると選手の集中力は増し、観客席も静まり返った。そして上の句が読み始められるとすぐに札を取る音や声が響いた。自分たちが得意とする札が取れた喜びや一瞬の差で取れなかったと悔しがる様子が窺えた。クラスカードが上がると仲間の活躍に観客席から歓声と拍手が沸き起こった。どのチームでも日々の努力の成果を発揮し、年々レベルが上がってきていると実感できる試合となった。

団体戦が終わると、各クラスの代表が五十首から三十首で競う個人戦。総合枚数には加算されないが、それぞれのクラスを応援する声は最高潮に達し、札を取る素早さに全員が魅了された。校友会役員・室長・庶務委員のスムーズな進行と選手の活躍により充実した二時間はあっという間に過ぎていった。

白熱した戦い

結果

総合優勝　二年Ｂ組、**準優勝**　二年Ａ組
個人戦優勝　奥田健吾(3Ａ)、**準優勝**　中川初保(2Ａ)
六歌仙優勝　**小町**　三年Ａ組、**業平**　二年Ａ組、**遍照**　二年Ｂ組、**喜撰**　三年Ｂ組、**黒主**　一年Ｂ組、**康秀**　二年Ａ組

価値観を広げた三日間

沖縄へ修学旅行

再び伊勢の地に戻ってきたとき、何より全員で無事に旅行を終えられたことに大きな安堵感を覚えた。満足気な顔で帰っていく生徒たちを見ながらこちらも充実感でいっぱいになる、そんな三日間となった。

上／平和祈念公園にて
下／琉球村体験学習

朝七時に伊勢を出発した初日。初めての飛行機に大興奮の生徒が多い中、無事に沖縄に降り立ち、まずは波之上宮へ。粛々と正式参拝を行い、まさに一つに重なった拍手に身も心も引き締まり、安全に旅を進められることとたくさんの素敵な思い出を作れることを願った。「平和学習」として訪れた平和祈念公園とひめゆりの塔。想像をはるかに超える戦争の実態に胸が締め付けられ、今自分たちに何ができるのか、生徒たちも様々な思いを巡らせたようだ。

朝から汗ばむ陽気の二日目。首里城、今帰仁城跡の世界遺産の見学に琉球村での体験学習など、盛りだくさんの内容であった。また美ら海水族館で見たジンベエザメの餌を食べる姿は圧巻！　海の神秘にも魅せられた。豪華なリゾートホテルで夕食の沖縄料理を堪能した生徒たちは、初日の反省もあり、落ち着いた行動を心がけながら友達と思い思いに最後の夜を過ごした。

最終日。朝食後のビーチ散策で沖縄の透き通るような美しい海を満喫したあと、一行は国際通りへ。お店の方々の笑顔が溢れ、賑わいを見せる通りで、お土産など存分に買い物を楽しんだ生徒たち。きっと家族の喜ぶ顔を思い浮かべていたことだろう。

あっという間の三日間だったが、この旅行を通して沖縄の人々・文化・歴史に触れ、大いに自分達の価値観を広げた。また、お互いに声をかけて協力し合う集団行動の大切さを学んだ。それを支えて頂いたたくさんの方方への感謝の気持ちを忘れず、旅行を通して学んだことを今後の生活の中でぜひ活かしてもらいたい。

教諭　小林誠治

新校友会役員の紹介

十二月十四日の立会演説会・選挙を経て、新たな本部役員が誕生した。次に七名の抱負を掲げる。

総務委員長　二年　**金子　結香**

二十三年度メンバーが三人もいるという今回の校友会本部。これまでの一年間で行ってきたことがもう一度、校友会としてこの場で出来る。それは私にとってとても大きなチャンスに思えました。校友会としての「形」を的確に作り上げ、＋αの力を出していけるようにしたいです。行事、イベントを運営するにあたって七人で協力しながら完成度の高いものを探っていけるように頑張りたいです。

総務副委員長　二年　**青木　菜華**

私が前回に引き続き校友会役員になりたいと思ったのは、前回の校友会で多くの事を学び、とても充実した生活を送ることが出来たからです。大変な事も沢山ありましたが最後の行事「皇中祭」では力を合わせて大成功を収めることが出来ました。前年度の経験を生かし、成功、喜びを糧にしてこれから頑張っていきたいです。

総務副委員長　二年　**三谷　陽奈**

私は総務副委員長に任命されて、校友会役員二年目として今度は教える立場に立つという強い責任感が芽生えました。新しく校友会役員となった四人を引っ張っていきたいです。また、前年度始めたばかりの校友会本部役員と学級とを繋げるシステムをしっかりと固めていきたいと思っています。そしてその繋がりを強めていくことで全校生徒がより快適に学校生活を送れるようにしたいです。

みんなで力を合わせてがんばります!

書記　二年　**荒木　美来**

私は皇學館中学校を笑顔溢れる学校にしていきたいです。そのためにまず私自身がずっとずっと笑っていたいです。笑っていると嫌なことは忘れられ、それに心が軽くなって優しくなれます。本当に大切なことだと思います。私が悲しいとき、友達がおもしろいことをして笑わせてくれるので良い気持ちになれます。今年度の校友会役員が笑顔でおもしろいと思ってもらえるように、お仕事を精一杯笑顔でやっていきたいです。

書記　二年　**齋藤　暢**

僕が校友会役員になった理由はこの皇學館中学校を盛り上げていきたいと思ったからです。例えば、この学校の良い所「挨拶」を学校内だけではなく地域の方々にも積極的に出来るようにしていきたいです。そして活気溢れる中、学校の行事をより楽しめるものにしたいと思います。校友会本部役員になったからにはこの学校がより良いものになるために精一杯頑張りますのでよろしくお願いします。

会計　一年　**高山　大雅**

僕は去年の校友会の人たちを見てとても感動し尊敬しました。先輩たちに憧れて選挙に立候補しました。当選するか不安だったけれど憧れの校友会本部役員になれました。これから僕は笑顔が満ち溢れている皇學館中学校にしていきたいと思っています。そのために色々なイベントを盛り上げていきたいです。そしてこの七名のメンバーも笑いの絶えない一年にして、皇學館中学校に来て良かったとみんなに言ってもらえるようにしたいです。

会計　一年　**細川　実玖**

私が立候補した理由は、皇學館中学校のために、少しでも役に立てたらと思ったからです。校友会役員となった今、校友会の一員として皇學館中学校の生徒全員が楽しく過ごせるような学校にしたいと思います。そのために本部の仲間と協力し、実現するために努力します。そして周りの人から皇學館中学校は良い学校だと思ってもらうことが出来たら嬉しいです。

卒業生の声

この春、卒業を迎える中高の生徒に三年間の学校生活を振り返り、学んだことや感じたことを綴っていただきました。

高校

部活動で人として成長

三年五組　橋本　匠

卒業にあたり高校生活を振り返ってみると、皇學館高等学校で過ごした三年間はとても短く感じ、入学した日のことがつい昨日のことの様に感じます。思えば楽しかったこと、辛かったこと、嬉しかったこと、悲しかったこと、たくさんの思い出があります。その中でも私が一番印象に残っているのはクラブ活動です。

私は三年間陸上競技部に所属していました。毎日チームメイトと共に汗を流し、辛い練習を乗り越えてきました。練習メニューについて仲間ともめることもありました。時には自分の記録に腹を立て、八つ当たりしてしまうこともありました。しかし部活動は私にとって人として成長できる最高の場でした。人間関係はもちろんのこと、チームメイトからもたくさんのことを学びました。怪我をしても練習し続ける人もいました。雨の日も風の日も黙々と練習に励む人もいました。その人たちから学んだこと、それは「努力は必ず報われる」ということです。人は努力した分だけ自分に返ってくるということです。それは部活動だけではなく、これからの人生においても活かせる大切なことだと私は思います。

私は三年間、学業でもクラブ活動でも誇れるような成績を残すことは出来ませんでした。しかしこの素晴らしい学校で学んだたくさんのことが一番の誇りです。これからの長い人生、高校で学んだことを最大限に活かして頑張っていきたいと思います。最後になりましたが、共に過ごした友人たち、お世話になった先生方、そして三年間通わせてくれた両親に感謝します。本当にありがとうございました。

学んだことを活かしたい

三年八組　荒木　志帆

入学してからの三年間は、とても楽しいことばかりでした。入学したての頃は学生生活や勉強に取り残されないか不安でしたが、クラスの皆と力を合わせた体育祭や、一つのものを作り上げた皇高祭などを経験し、学ぶことの面白さを知りました。中でも、一番の思い出は修学旅行です。北海道の景色はとてもきれいで、見る物すべてに心を奪われました。四泊五日はあっという間でしたが、大好きな友達と過ごす時間は大変楽しく、素晴らしい体験でした。

校友会の副総務委員長を務めたこともいい経験になりました。最初は、きちんと役割を果たせるか心配でしたが、体育祭や皇高祭などの学校行事を運営していく中で自信がつき、また、他の役員の方々や先輩のサポートもあって立派に役目を果たすことができました。

これらの活動を通して皆で協力して一つのことを成し遂げたときの達成感を味わい、自分自身大きく成長することができました。この経験を活かし、大学に進学してからも勉学に邁進していきたいと思います。

中学

人とのつながりの深さを学ぶ

三年Ａ組　奥田　健吾

僕の中学校生活において欠かせないことと言えば、校友会活動と部活動でした。

部活動では、先輩からたくさんの事を教えていただきました。夏の暑い日、冬の寒い日ともに練習に励み、試合に臨みました。同じ目標に向かって全員が努力し、協力しあう大切さも学びました。そして、先輩方から受け継いだ事を後輩に伝えていかなければいけない難しさも学びました。部活動を通して僕は人とのつながりの深い意味を学んだように思います。

校友会活動においては、二年間の活動を通してたくさんの事を経験しました。まず連合陸上の応援、生徒の気持ちを一つにするため、僕たちが中心となり進めていくことの難しさを知りました。そしてその努力の結果、生徒全員が一致団結して応援に臨めたことへの達成感を得られました。皇中祭では、校友会として裏方の仕事も多く、僕たちが一生懸命働かなければ皇中祭も成り立っていきません。校友会活動という責任のある仕事を任され、大変な事も多かったですが、僕たちが頑張った事によって一つの行事を成し遂げた事は僕にとって大切な思い出となりました。

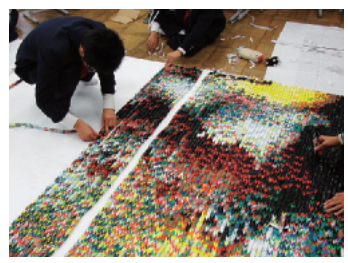
僕が様々な経験をやり遂げることができたのは先生方の細かな指導のお陰でした。そして僕を信頼してくれた仲間のお陰です。僕は皇學館中学校に入学して本当に良かったと思いました。

クラスの絆を感じた

三年Ａ組　八木　綾那

この皇學館中学校で過ごした三年間は、とても充実していました。一、二年生の頃は先輩たちに追いつくために、三年生では後輩たちのお手本になるために全ての行事にいつも全力で取り組みました。もちろん全て良い結果ではありませんでした。しかし、みんなで力を合わせて頑張ったので悔いは無いし、とても素晴らしい思い出になりました。その中でも私の中で一番印象に残っているのが、皇中祭のクラス展示です。

去年は東日本大震災があり、自分たちに出来ることは何かと考え、被災地の復興への願いを込めて折鶴アートを作ることになりました。まずは鶴を折ることから始まりましたが、想像以上に大変な作業で思うように進みませんでした。しかしそんな時、遅れている分を自ら折ると手伝う子達もいて、私はその時、面倒な事を自分から進んでやるのはすごいなと思いました。



みんなで作った折鶴アート

それ以来、あまりまとまっていなかったクラスが一つになり、作業もきちんと進み本番を迎えることが出来ました。それまでに多少、ぶつかり合うこともあったけれどクラスで一つのことに向かってやってこられたので、改めてクラスの絆を感じました。結果は優勝だったので、嬉しくて涙が止まりませんでした。

今まで泣いたり笑ったり、色んな思い出があります。嫌になって投げ出したくなることもありました。でもこの三年間をこのメンバーで過ごせてよかったと思います。このメンバーは一人ひとりが優しくて思いやりを持っています。そんなすごい仲間たちの中で三年間を共にすることができ、本当によかったです。

贈る言葉

おめでとう　頑張りましょう

高校第三学年主任　尾上　誠一郎

試験方法の変更により、各地でドタバタをまねいたセンター試験も終わった。特に特進と六年制の担任の表情が険しい。それは出来ていないからでは無い。これから自己採点が始まるからだ。思いは一つ「頼む」。

どこに進路をとろうと行った先々で頑張ることが大切だと思う。

ここで平成二十三年度、最も感動させられたモノを紹介させていただく。

「人間伸」

人間が伸びる時と言うのは

歯を喰いしばって
己の無力に泣くときである
惨敗の中からにじみでる
闘志であり
悲境のどん底から
一歩、一歩はいのぼる
ひたむきな努力を
重ねる時である

北上市剣道協会HP
剣道いちに会HPより引用

壊滅的な打撃を受けた三陸沿岸の子どもたちを励ますと北上市の剣道協会が「三陸沿岸・北上少年剣道交流錬成会」を開催するにあたって、財源確保のために、この「人間伸」の手拭いを作成された。

文章は北上市剣道協会会長の親友であり、かつて高校教師をされ、村上ともか氏の漫画「六三四の剣」のモデルとされる故駒井元剣道教士七段の遺訓だそうだ。

私も本校の卒業生の一人だが、今後も精一杯の努力をしたいと思う。

第四十七期生の皆さん卒業おめでとう。

今後の皆さんの御活躍を期待しています。

目標を持って、しっかり前に進んでください

中学校三年Ｂ組担任　岩城　美紗

三年生の皆さんは皇學館中学校で過ごした三年間をどう感じているのでしょうか。暑い夏に練習を重ねて気持ちを一つにした体育大会、皆で協力し乗り越えた皇中祭や合唱コンクール、沖縄の人々の歴史や温もりを感じた修学旅行など私の中には皆との楽しい思い出でいっぱいです。

もうすぐ高校生です！　中学生としての残り少ない日々を大切に過ごし、目標を持って前に進んでください。

皇學館高等学校創立五十周年・皇學館中学校創立三十五周年記念事業　寄付者芳名

十二月三十一日現在の募金状況は次の通りです。ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

同窓会会員

愛知県
一万円　乾　敏夫様

三重県
三万円　北川　峻佑様
五千円　阪江　豪様

兵庫県
五万円　岩田　勝成様

皇學館高等学校創立五十周年・皇學館中学校創立三十五周年記念事業寄付金進捗状況

平成23年12月31日現在

区　分	申込件数	申込金額(円)	納入金額(円)
宗教界	3	450,000	450,000
企業	42	4,240,000	4,190,000
一般（旧教職員・篤志家等）	16	535,000	535,000
同窓会会員	174	7,230,000	7,230,000
後援会賛助会員	67	1,140,000	1,140,000
本法人関係	125	3,685,000	3,635,000
合　計	**427**	**17,280,000**	**17,180,000**

現代日本社会学部
現代日本塾＆経営セミナーを開催

現代日本社会学部では日本を動かす人材を確実に育てるステップとして、多彩な教育プログラムを展開している。今回は「現代日本塾」、「経営戦略セミナー」の模様を紹介する。

現代日本塾（第十三回）
親子になる！ 家庭養護促進協会の活動から見える非血縁の親子は

講師●岩崎 美枝子先生
社団法人 家庭養護促進協会 理事

十一月四日、家庭養護促進協会理事の岩崎美枝子氏を講師に迎えて、第十三回「現代日本塾」が開催された。同協会はさまざまな事情で親と離れて暮らす子どもたちのための里親開拓運動「あなたの愛の手を」を五十年近く展開してきた民間団体だ。その中心となって養子縁組を前提とした里親のマッチングと親子関係構築の指導をされて来られた岩崎先生は長年の実績と経験を踏まえて、血のつながりの無い「里子」と「育ての親」が親子となってゆく意義や時には苦労（見せかけの時期・試しの時期）をしながらもやがて絆を深めて真の家族となっていく喜びを語った。「子どもが健全に育つためには、特定の大人との安定した信頼関係が継続されなければならない」との言葉に、受講者一同、親への感謝の思いを新たにしていた。

現代日本塾（第十四回）
地域密着型経営と今後の展望

講師●濱田 典保先生
赤福株式会社 代表取締役

第十四回「現代日本塾」が、十二月一日、赤福株式会社代表取締役の濱田典保氏を講師に迎えて開催された。

冒頭、「経営感覚」と「物語」を勉強することの大切さを語った濱田先生は、続いて、神宮を戴く伊勢の地の意味や宝永四年（一七〇七）の創業以来、「赤心慶福」の心を旨とされる赤福の三百余年にわたる歴史、おかげ横丁における町づくりや日本人の感性を大切にする年中行事などの企画について話された。そして、今後の展望のほか、「安全と安心」や「改善と協働」といった目標のもとで行われている取組みを説明。いずれも具体的、かつ、わかりやすい内容で、学生からの質問にも丁寧に答えていただいた。

経営戦略セミナー（第一回）
JR東海の経営戦略

講師●葛西 敬之先生
東海旅客鉄道株式会社 代表取締役会長
本学客員教授

十一月二十四日、JR東海会長（本学客員教授）の葛西敬之先生を講師に迎え、現代日本社会学部の学生を対象とした第一回「経営戦略セミナー」が開催された。

当日は、詳細な配布資料とパワーポイントおよび動画でJR東海の経営戦略について明確に解説していただいた。特に経営戦略を「現在・近未来（戦略）・未来（大戦略）」に区分して、日々の安全運転の確保、二七〇km／h化への取組み、そして超伝導リニアによる中央新幹線の建設と、夢が現実化されてゆく過程をわかりやすく具体的に教えていただいた。

学生にとっては明快な経営戦略を掲げて実行してゆく先生の姿を目の当たりにしたことで、その心構えや姿勢、行動の大切さをしっかりと心に刻む機会になったようだ。

創立百三十周年・再興五十周年記念事業 寄付者芳名

十二月三十一日現在の募金状況は次の通りです。ご協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

創立百三十周年・再興五十周年記念事業寄付金進捗状況　平成23年12月31日現在

区分	申込件数	申込金額(円)	納入金額(円)
宗教界	634	777,247,000	767,247,000
館友	730	81,324,000	79,099,000
篤志家	49	31,990,000	31,870,000
萼の会	1,888	101,071,000	101,071,000
企業	104	62,635,000	61,345,000
本法人関係	260	60,392,000	60,002,000
合計	3,665	1,114,659,000	1,100,634,000

宗教界（神社界）
埼玉県
十万円［五万円増額］
久伊豆神社様

館友
福井県
十五万円［五万円増額］
粕谷　興紀様

京都府
二百万円［百万円増額］
佐古　一洌様

企業
大阪府
五万円　出原　真哉様

大分県
二十万円　小野　日隆様

三重県
百八十万円［三十万円増額］
千巻印刷産業㈱様

本法人関係
八十万円［三十万円増額］
井面　護様

個人情報保護に関する法律の施行に伴い、ご芳名・金額等の掲載をご希望されない方々につきましては、別記とさせていただきました。■館友／1名

コミュニケーション学科
第十二回 高校生英語スピーチコンテスト
過去最多の四十五名が参加

コミュニケーション学科では高校生の英語への興味や能力を高め、また、地域社会へ教育研究の成果を還元しようと平成十二年度から「高校生英語スピーチコンテスト」を開催している。

十月二十三日に開かれたコンテストには大阪府や和歌山県など県外を含む十二校から過去最多の四十五名が参加。教科書等に掲載された良質の英文（テーマは自由）を約三分間スピーチし、内容の難易度や発音、リズム、表現力などを競った。中には、ただ暗唱するだけでなく、豊かなジェスチャーや歌、さらに楽器の演奏を交えるなど伝え方に工夫を凝らしたスピーチも。審査の結果、一位に三重高校二年の榊原萌さん、二位に高田高校一年の小澤美友さん、三位に智辯学園和歌山高校一年の玉川真央さんが選ばれ、それぞれ表彰状と盾、副賞の図書券が贈呈された。

上／英語のうまさだけでなく、伝える力も求められるスピーチ
下／左から、玉川さん、榊原さん、小澤さん

子どもの持つ潜在能力を引き出す教育について表情豊かに語り、見事一位に輝いた榊原さんは、「暗記は苦手ですが、英語が自然と頭の中に浮かんでくるようになるまで一生懸命覚えました。今日心がけたのは、観客席の人と対話しているような形で表現すること。英語をうまくしゃべろうとするのではなく、心から英語が好きなのでそれだけでも伝われば、と思ってスピーチしました」と入賞の喜びを語った。

大会会長を務めるコミュニケーション学科主任の豊住誠教授は、「教科書や歴史に残るスピーチなど良質の英文の暗記は、英語学習において効果的。本大会が高校生のみなさんが英語力をつける一助になればうれしい」とコンテストの成果をあげた。

先輩、お元気ですか
OB・OG訪問

山本 啓介 氏
長崎県議会議員

文学部国文学科第三十四期（平成十一年三月）卒◆在学中は剣道部主将や精華寮・寮生長を務める。卒業後は衆議院議員虎島和夫氏や谷川弥一氏の秘書として活動。平成二十三年四月に長崎県議会議員に初当選。

思い出は精華寮が中心です。教授の家での楽しいひと時も忘れられません。部活動は剣道部に所属していましたが、厳しい合宿などが思い出されます。社会的には学生という位置づけではありますが、人間の成長過程においては与えられる権利とその立場に最もギャップが感じられる時期です。しかし、常に神宮を感じられるこの地では不安定になりがちな生活の中に、自然と自分と向き合う時間が存在します。これまでの事、これからの事、様々なことを仲間と熱く語り合っては、一人の時に「私が成すべきことは何だろう」と自身に問いかけていました。

私にとって皇學館大学の魅力は、日本人の心のよりどころである神宮の傍にあるという事であり、それが多方面に作用しています。ゆっくりと深く自身に対して問いかける事の出来た四年間でした。物事の捉え方や事に臨む時の姿勢など、その多くは大学で固まったものです。

私は現在、長崎県議会議員として故郷の振興と、地方から国家を盛り上げる事に取り組んでいます。政治の起点はいつの世も、人人の願いや思いであることが素晴らしいと考えます。多くの人々の生活に触れ多くの人々の心に触れる事が出来れば、と間違いなく大学で学んだことを持って事にあたっています。

学生のみなさん！神様の傍に過ごせる特別な空間と時間で心を磨いてください。そして、日本を盛り上げていきましょう！

学生が岩手で震災ボランティア

十一月十六日から二十日にかけて、学生三名が東日本大震災で被害に遭った岩手県山田町へ赴き、ボランティア活動を行った。学生はいせ市民活動センターの災害ボランティアバス第三陣に乗り込み、五日間の日程を無事に終えた。

今回従事したボランティアは瓦礫の撤去作業と「伊勢フェスティバル」の開催だ。瓦礫の撤去については震災から八カ月が経っていることもあり、大半は片づけられ静かな印象だったようだ。フェスティバルは山田町にあるスーパー「びはんプラザ」で開かれた。このイベントでは赤福やおにぎりせんべいを配布。それらを景品にした輪投げやダーツなどのゲームを行い、子どもからお年寄りまでたくさんの人に楽しんでもらえた。

輪投げに成功すると拍手や歓声がわき盛り上がった

なお、山田町では厳しい寒さが続く今なお仮設住宅での避難生活を余儀なくされている人も多い。一方でボランティアの数は減少しており、一層の継続的・長期的な支援が必要だ。本学でも震災の記憶を風化させることなく、学生の自発的なボランティア活動をサポートしていきたい。

頑張らなきゃいけないのは私たち

教育学科四年　山口　茜

岩手県へ行き現地の人たちと話をしてみて、「今まで自分は何をしていたのだろう」と思いました。「ありがとう」と何度も言い、私の手をとり泣いてくれたおばあさん。津波の話を、言葉を詰まらせながら話してくれたおじいさん……。頑張らねばならないのは、もはや東日本の人たちではないと感じました。もう十分すぎるくらい頑張っている東日本の人たちに、それ以外の人たちが何をできるのか、もう一度考え直していきたいと思いました。

多くの人に想いをつなげたい

社会福祉学科四年　小田谷　美緒

地震が起きた頃から行かなくてはと思っていたが、実際に行くまでに八カ月もかかってしまったことに、現地に足を踏み入れてさらに後悔した。瓦礫撤去の作業は基礎だけを残した民家の跡で行った。「ここに家族で過ごしていた家があったのか」と思うと言葉にならなかった。

まだまだボランティアが必要とされていると感じたし、これからできる支援を考えていきたい。また、この想いを多くの人につなげていきたい。

約千三百人が避難訓練

十一月十日、Ⅳ講時受講の学生約千三百人と教職員を対象に避難訓練が行われた。訓練では十六時十分に地震が発生したと想定。放送や誘導に従って避難場所の第一グラウンドに集結することを目的としている。計画では同時二十四分頃には避難終了との見通しを立てていたが、実際は二十三分に完了。学生にとってはこうした実践の必要性や防災意識を高めるよい機会となったはずだ。

訓練に参加した社会福祉学科三年の中村愛さんは「地震に備えてこうした訓練は必要だと思う」、同羽根未来さんは「〈十一〉という日付が近づくと東日本大震災やアメリカで起こったテロを連想するので、今日の訓練はいいタイミングだと思った」と話していた。

第１グラウンドに集まった学生たち。避難経路や避難場所を再確認できる機会となった。

イベント情報（2～3月）

2月

25(土) 皇學館大学共催講座　近鉄文化サロン阿倍野
特別公開講座「戦う神主たちⅡ」
◆松本丘 文学部准教授

3月

10(土) 皇學館大学共催講座　近鉄文化サロン阿倍野
古事記を読む「大年神の子孫」
◆白山芳太郎 文学部教授

24(土) 皇學館大学共催講座　近鉄文化サロン阿倍野
神道と仏教「賀茂神社（上・下）」
◆河野訓 文学部教授

皇學館大学 卒業式についてのお知らせ

平成23年度 学位記・修了証書授与式および祝賀会を、下記の日程で執り行います。

平成24年３月17日(土)

❶神宮（内宮・外宮）参拝 ▶外宮表参道手水舎前 集合
文学部・文学研究科・専攻科……8:20集合 ～10:50
教育学部・社会福祉学部・社会福祉学研究科…8:30集合 ～11:00
❷学位記授与式 ▶記念講堂……11:30～12:40
❸教員免許状・階位證等交付 ▶各教室…12:50～13:50
❹祝賀会 ※卒業生のご家族の皆様もご参加いただけます。
▶総合体育館メインアリーナ……14:00～15:30

教育学部４年有志による卒業記念ミュージカル

平成忍者にんにん
～大切なモノをさがして～

入場無料・予約不要

2/23(木)
三重県総合文化センター 中ホール
開場●15:00　開演●15:30

3/3(土)・4(日)
皇學館大学 記念講堂
開場●12:30　開演●13:30

◉各講座の詳細につきましては、本学ホームページにてご確認いただきますようお願い致します。
◉共催講座（近鉄文化サロン阿倍野）のみ、有料です。お問い合わせは近鉄文化サロン阿倍野（0120-106-718）へお願い致します。
◉その他お問い合わせは、皇學館大学企画部（☎0596-22-6496）へお願い致します。

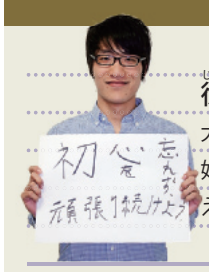
編集後記

今号の学園報では、中学・高校の話題について、これまでの「皇中・皇高NEWS」のページ構成にこだわらず、新企画の「学び舎探訪」や「卒業生の声」など、中・高関連の紙面を大幅に拡大して掲載しました。今後は中学・高校・大学の絆をよりいっそう深められるよう、文字通り『全学一体』の学園報にできればと願っています。中・高の生徒・教職員の皆さんからの情報提供をお待ちしています！
（kikaku@kogakkan-u.ac.jp）【企画部】

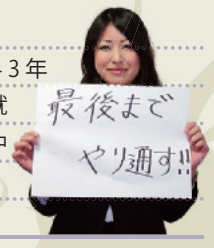
新春特別企画

今年の抱負を聞きました

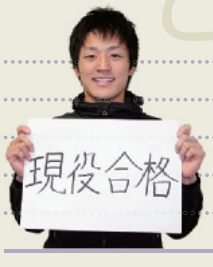
2012年、いよいよ新しい年が始まりました。みなさんの今年の抱負は何ですか？ 目標があると、日々の生活にいい緊張感が生まれます。この一年が充実した年になりますように。



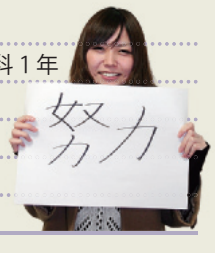
徐（じょ） 偉博（いはく）君●コミュニケーション学科３年
大学院で経営学を学ぶ予定。人間が好きなので、人事など人と関わりあえる仕事に就きたいです。



山口 阿美さん●社会福祉学科３年
遊びやバイトを控えめにして、就活・実習・国家試験に向けて集中します！



成瀬 要君●教育学科３年
中学、高校時代の野球部の監督に憧れて、自分も体育教師をめざそうと思いました。ぜったい現役合格するぞ！

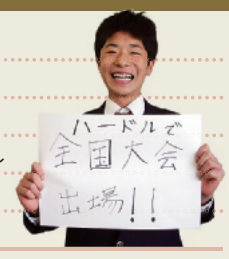


畑 伶奈さん●現代日本社会学科１年
去年のように遊びすぎず、今年こそ勉強を頑張ります。めざすは、社会福祉士！

工藤 和貴君●神道学科３年
神職をめざす者として、いつまでも学生気分に浸ることなく、オンオフの切り替えをしっかりやっていきたい。

山田 沙耶佳さん●国文学科２年
中学の国語の先生をめざしているので、試験準備をはじめていきたい。

山川 千亜希さん●国史学科２年
今年は就活にゼミなど初めて体験することばかり。楽な方向に流されず、しっかり前を向いて歩いていきたい。



濱口 翔太君●中学２年
去年の成績は市の大会で９位。今年こそマイナス２秒を達成して全国大会出場を狙います！

中川 初保（うぶほ）さん●中学２年
副室長の経験を活かし、まとめる力のある３年生になりたい。後輩にさすがと思ってもらえたら嬉しいな。

江川 真林（まりん）さん●高校２年
笑顔は伝染するので絶えず笑っていようと思う。災害が多かった去年の分まで。

矢野 翔大君●高校２年
周りに流されず、自分の気持ちを強くもって過ごしたい。釣りやバドミントンなど趣味も充実させたいです。